

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	久保田 真功
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) いじめをめぐる子どもたちの意識と行動に関する実証的研究 — 「いじめ集団の四層構造論」の批判的検討—			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)	教授	山田 浩之	
審査委員 (Name of the Committee Member)	教授	中矢 礼美	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	佐々木 宏 (北海道大学)	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	滝沢 潤	
審査委員 (Name of the Committee Member)	准教授	尾川 満宏	
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文は、小中学生を対象とした質問紙調査をもとに、いじめをめぐる子どもたちの意識と行動について検討することを通じて、「いじめ集団の四層構造論」を批判的に検討したものである。日本におけるいじめ研究（とりわけ調査研究）は、「いじめ集団の四層構造論」という強固な枠組みに囚われるあまり、半ば停滞状態にある。そのため、「いじめ集団の四層構造論」の批判的検討は、今後のいじめ研究の発展にとって必要不可欠な作業と言えるだろう。</p> <p>論文の構成は、次の通りである。</p> <p>序章では、研究の目的を明示するとともに、文部科学省のいじめ統計を左右する要因について検討している。また、いじめに関する先行研究の整理検討を踏まえた上で、本論文の分析課題を明確にしている。</p> <p>第1章では、小学生および学級担任教師を対象とした質問紙調査をもとに、教員のいじめ予防策への取り組みが学級集団特性を経由して間接的にいじめの抑制につながっていることを明らかにしている。</p> <p>第2章では、小学生を対象とした質問紙調査をもとに、学級集団のあり様がいじめの発生を左右するだけでなく、いじめ被害者の心の傷の回復をも左右することを明らかにしている。</p> <p>第3章では、小学生を対象とした質問紙調査をもとに、①いじめ被害者の大半は自身に付与された否定的ラベルの「修正」を試みる能動的な存在であること、②いじめ被害者の対処行動はいじめ終結の契機にはなり得ても、いじめの早期解決には直接的には結びつかないことを明らかにしている。</p> <p>第4章では、小学生を対象とした質問紙調査をもとに、加害者によるいじめ行為の正当化に影響を及ぼす要因を明らかにしている。</p> <p>第5章では、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、いじめ加害者がいじめによって得られる利益に着目し、いじめをエスカレートさせる要因を明らかにしている。</p> <p>第6章では、中学生を対象とした質問紙調査をもとに、子どもたちがいじめを傍観する理由と、それらの理由に影響を及ぼす要因を明らかにしている。</p> <p>終章では、各章で得られた知見を整理し、それらを踏まえた上で、「いじめ集団の四層構造論」に</p>			

おいて見逃されていた点を整理するとともに、「いじめ集団の四層構造論」の限界について述べている。その上で、今後のいじめ研究の方向性を示している。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

第1に、量的研究だけではなく質的な研究（ラベリング理論や自己物語論など）によって得られた知見も積極的に採用することにより、質的研究と量的研究の架橋を志向している、ということである。従来のいじめ研究では、量的研究は質的研究の批判の対象とはなっても、量的研究と質的研究のそれぞれが独立した形で行われることが大半であり、双方が交わることは稀であった。

第2に、被害者や加害者、傍観者（観衆を含む）のそれぞれに着目した分析を行うことにより、「いじめ集団の四層構造論」の枠組みに囚われているだけでは得られなかった知見を導き出している。「いじめ集団の四層構造論」では、学級集団特性がいじめの発生に及ぼす影響を過度に強調するあまり、いじめをめぐる個々の子どもたちへの着目が不十分であった。

第3に、学級集団特性といじめの発生状況とを媒介する要因の一端を明らかにしている。「いじめ集団の四層構造論」は、学級集団特性によっていじめの発生状況が左右されることを指摘しつつも、そのメカニズムの検討は十分に行われていなかった。本研究はそのメカニズムに迫ることによって、「いじめ集団の四層構造論」が見逃してきた論点や実態を明らかにし、いじめ研究の前進に貢献している。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和6年4月8日

備考 要旨は、A4版2枚（1,500字程度）以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)